

Chiorin!

<http://jeso.jp/>

第14号 (2015年12月)



日本、金1・銀1・銅2

参戦開始以来、8回連続の全員メダル獲得!



メダル全員獲得に盛り上がる日本選手団 (9月20日)

ブラジル南部のポソス・デ・カルダスで9月13日から20日にかけて実施された第9回国際地学オリンピックで、日本は派遣4選手全員がメダルを獲得した。メダルを獲得したのは、金メダルが辻有恒選手(灘高)、銀メダルが土井聖明選手(広島学院高)、銅メダルが茂木隆伸選手(筑波大附属駒場高)と沖中陽幸選手(広島学院高)で、いずれも3年

生。国際混成チームを作って野外調査とその成果発表を行い、成績を競う国際協力野外調査(ITFI)では、辻有恒選手が属したチームが金賞を受賞した。

今回は、参加した選手の平均点が上位の3つの国と地域が発表され、台湾(55.18点)、韓国(54.85点)、インドネシア(52.48点)に開催地で作られたガラス製のトロフィーが贈られた。

激化するメダル獲得競争

ブラジル大会には22の国と地域から85名の選手が参加。前回大会とくらべ、参加した国と地域数は1つ増え、選手数も3人増えたが、過去最高だった2011年のイタリア大会(参加国・地域数26、選手数104)には届かなかった。

しかし、メダル獲得競争は過去に無い熾烈さであった。毎回、金メダルは韓国

と台湾がそれぞれ2つから3つ獲得するケースが多かった。ところが、今大会の国・地域別金メダル獲得数は、韓国が2を記録したものの、それ以外は1以下。一方、金メダルを獲得できた国・地域は8カ国に広がった。

日本はこの中で、金メダルを1つ確保、また、初参戦の2008年大会以来維持してきた派遣選手的全員メダル獲得を今年も続けることが出来た。日本は昨年金3

個を獲得し、韓・台からなる「第1グループ」に食い込めるようになったと思われたが、目標の第1グループもやや苦戦といえる状況。

このような情勢について、久田健一郎団長(筑波大学)は「韓国・台湾が強いのは銀メダルの獲得数を見ても明らかで、依然『第1グループ』ということなのだろう。日本は今回それに食い込めなかったが、全員がメダルを獲得できたのは大きい。今後もこのレベルを維持するとともに、大会前の強化合宿などを通して、より好成績を取れるような態勢を構築したい」と話している。



各国のメダル獲得数

	国・地域	金	銀	銅
1	韓国	2	2	0
2	台湾	1	3	0
3	インドネシア	1	2	1
4	オーストラリア	1	2	0
5	タイ	1	1	2
	日本	1	1	2
7	インド	1	0	2
8	ポルトガル	1	0	1
9	イタリア	0	2	2
10	フランス	0	2	1
	ルーマニア	0	2	1
12	ロシア	0	1	2

(※順位は、公式なものでは無くメダル獲得数を、金、銀、銅の順にしたもの)

本紙は金メダルか銀メダルを1つ以上獲得した国と地域を集計した(上の表)。その他の参加国は、スペイン、ノルウェー、アメリカ、カザフスタン、イスラエル、スリランカ、ウクライナ、ドイツ、オーストリア、ブラジルでいずれも銅メダルを1つ以上獲得した。

【今号の誌面】選手達の感想・現地での様子(2面)。国際大会の課題と日本大会への期待。ブラジル大会小話(3面)。リレーエッセイ(4面)。

刺激的だった異文化体験

地球の裏側で精一杯戦いきった日本選手団

日本との違いに苦労した

英語のコミュニケーションが大変でしたが、理解してもらおうと努力すれば自分の意見を伝えられることがわかり、物怖じせずに話しかけられるようになりました。ただ、ずっと英語を聞き続けると頭がかなり疲れるようで、毎晩部屋に戻るとすぐに寝てしまいました。

試験は岩石鑑定の問題が特に難しく、日本では見られない岩石が出題され満足できる結果が出せませんでした。出発前にもっと勉強しておけば良かったと後悔しています。試験開始のタイミングや、実技試験の間の長い待ち時間、何かあったときに英語で確認しないといけないなど苦労しましたが、現地は季節が春で過ごしやすく、食事も美味しく体調は良かったです。この大会の経験が将来の糧になると思っています。

沖中 陽幸
(広島学院高等学校3年)

コミュニケーション

筆記試験では非英語圏の生徒に対して問題の翻訳版の配布があるが、せっかくなので英語版もよく読んで解答していた。解いてみて感じたが英語でもできる

ようにしておくのが大事だろう。翻訳は元々の文章のニュアンスを損なってしまいがちで、問題の意図を誤解することもあり得る。それに幅広い言語能力は意義のあるコミュニケーションにつながる。

夜のフリータイムにはしばしば各チームの生徒による楽器演奏があった。ピアノやバイオリン、フルートなどの楽器の音色に大勢が聞き惚れていた。また特に仲良くしていた韓国の生徒は、ルービックキューブの強豪選手らしい。他にも、歴史問題や言語学に関する意見を求めてくる生徒もいた。多分野にわたる興味と洗練が参加選手に共通するものかも知れない。

辻 有恒
(灘高等学校3年)

大会への意識

日本を含め、アジアの国や地域の選手の多くは良いメダルを獲ろうとすることを意識しているように感じましたが、ヨーロッパや米国の選手はバカンス気分であるように見えました。聞いた話では、韓国の選手は空港でも勉強をしたそうです。それに対し、ヨーロッパの選手は試験中に途中退席するなど、メダル

を意識しているようには感じられませんでした。

しかし国際協力野外調査になると、英語が出来るヨーロッパ系の人が話の主導権を握るようになりました。ゆっくり話してと一言を伝えても、次の一文がゆっくりになるくらいで、なまった英語で高速で話を続けます。理解に苦しんだり何と言って良いかわからないことがしばしばありましたが、終わるころにはお互いに仲良くなることが出来ました。

土井 聖明
(広島学院高等学校3年)

問題にテーマ性があった

試験は石灰岩と二酸化炭素に関する問題が非常に多く、面食らってしまいました。あとで他国の選手とも話し合いましたが、皆もびっくりしていました。テーマ性のある大会は過去にもあったようですがここまではなかったようです。それでも何とか対応したかなと思います。

国際協力野外調査、Earth Science Project (ESP) とともに、グループでの課題解決、コミュニケーションが難しかったのですが、色々な国や地域のメンバーと取り組めて良かったです。ESPでは銀賞が取れましたが、出来れば皆と喜び合う時間が欲しかったなと思います。

茂木 隆伸
(筑波大学附属駒場高等学校3年)

ブラジルの雰囲気を楽しんだ

国際地学オリンピックでは、室内の筆記試験だけでなく、実技試験や国際協力野外調査などで、野外に行く機会も多く設けられた。

今回の実技試験では、野外の露頭で岩石・鉱物の同定、乾湿球での気温の測定、



ITFIの土壌調査の様子

川の流速測定、太陽の見掛け運動に関する課題に取り組んだ。

国際協力野外調査では、川の水質調査、農場での土壌調査、奇岩の調査の3種類の課題から1つが指定されて、1チーム7~8人の国際混成チームが協力して取り組んだ。結果はスライドと発表原稿にまとめて、発表時間12分、質疑応答3分間で発表をした。発表の際は必ず全員がマイクを握った。

参加選手や役員が楽しめるプログラムも用意された。現地にある日本庭園、展望台、大学などを訪れた。試験終了直後



地元の子供たちによるカポエイラ

の5日目夜には、ホテルのロビーで現地の子ども達が、カポエイラを披露した。カポエイラは格闘技や音楽、舞踏が組み合わさったもの。日本選手も迫力のある動きに拍手をしながら楽しんでた。

地学オリンピックにはじめて参加して

丸岡 照幸 (筑波大学)

国際地学オリンピックに今回初めて参加した。これまで、国内予選に協力させて頂いたときに伺っていたお話で、国際大会におけるメンターの仕事は大体わかっていたつもりであったが、体験してみないことにはわからないことも多かった。目の前の課題に精一杯取り組みながらも楽しむことが出来たように思う。

過去の報告書には体力の重要性が必ず揚げられていたが、今回は痛感した。これは寝不足、時差ボケでもうろうとなる状況に耐えるという単純な話では無かった。スケジュールが急に変更になったり、問題を翻訳している最中に数分間隔で問題に変更が加えられたりして、もうろうとした中で短時間に正確な判断をする能力が求められる、ということであると感じた。

各国の生徒達が打ち解け合う様子はとても印象的であった。日本代表選手は英語による意思疎通に自信がないと大会前に話していたが、一週間という短い期間に様々な国の生徒達と絆を深めていった。このことはメダルを獲得したこと以上にとても誇らしく思えたことであった。

ブラジルでの気づき

角谷 優馬 (三重県立津高3年・
ブラジル大会ゲスト生徒)

ブラジルでの経験はあまりに広範囲かつ膨大なので、何を書いたら良いのか思いあぐねていましたが、一つの答えに至りました。それは「ブラジル、いや世界は普通である」というものです。

私はブラジルに対して、サンバやアマゾンなど典型的なイメージを持ち、特殊性を感じていました。しかし、実際のブラジルは違った。たしかに日本とは違うものだらけでしたが、普通の人間の生活が営まれていました。人間の本質は地球の裏に来てても変わらないのだと気づき、はっとしました。

この思いは、世界のトップ生徒達と地球科学の議論をして、さらに深まりました。最初のうちは相違点に違和感を覚えましたが、地球科学という共通のものを通して相手を見ると、彼らも我々と同じ普通の人間でした。

来年の国際地学オリンピックは三重県で開催されますが、それに参加するみなさんには、偏見や心の中の壁を破壊して欲しいと思います。貴重な機会を頂いたこと、様々な方にご支援を頂いたことを感謝しております。ありがとうございました。

.....
Chiorin! リレーエッセイ no. 14

星を見て想うこと

大川 拓也



今年3月に茨城県つくばで開催された「とっぷ・レクチャー」で宇宙の話をした大川です。星を見ながらこの原稿を書いています。小学生のころから星好きで、よく夜更かしをしては望遠鏡で眺めています。日食や彗星など天文現象を追いかけるだけでも天文は最高の趣味として一生ずっと楽しんでいけるものです。そして今夜も流星群が見えるかも、と流れ星を待っています。

夜空に輝く星座の形は数十年では変わりません。星の配置は子どものときからまったく同じで、時を隔てて同じ星座を見上げると懐かしい感じもしてきます。変わっていくのはそれを見ている自分のほう。歳とともに視力が落ちたり生活が変わったり。世の中もどんどん変わります。でも、いま見ている星の光は途方も

ない距離から届いていて、そのことだけは昔と何ら変わってなくて、自分が生まれるずっと前からこの宇宙は存在し、何億年という遠い過去も実在する。宇宙を想うと不思議です。

長いタイムスケールを扱う地球科学とどこか共通する感覚なのかもしれません。岩石は過去を記録したタイムカプセルと言えますし、遠くの宇宙を観測するということは、古い地層を調べることと似ています。自分の居場所から過去へと伸びる時間軸は、足元方向にも天空方向にも続いているということです。

私の仕事は宇宙科学の広報ですが、大学時代は地球科学を学んでいました。宇宙のことと、地球のこと。時には趣味と本業とを行き来しながら、星を見たり、石を見たり。長い時間に想いをめぐらせ、

自分の悩みが何とちっぽけなことかと感じては、また頑張ろうと思ひ直す。そんなことの繰り返しです。

今夜も星を見てリフレッシュできました。そろそろ夜が明けますので、このへんで。

.....
おおかわたくや。JAXA 宇宙科学研究所の広報・普及担当。天文雑誌の編集長や国立天文台、科学館勤務などを経て現職。宇宙科学の最先端を伝えるとともに、星や宇宙に親しむ多数のイベントや出前授業などを実施。旧暦七夕に全国一斉に夜空を見上げる「伝統的七夕ライトダウン」キャンペーンの委員長も務める。

NPO 法人地学オリンピック日本委員会
ニューズレター Chiorin! (no. 14)
平成 27 年 12 月 5 日発行
発行人：NPO 法人地学オリンピック日本委員会広報部会
編集長：萬年一剛 (広報副主査・神奈川県温泉地学研)
〒113-0032
東京都文京区弥生 2-4-16 学会センタービル 3F
印刷所：あしがら印刷

Chiorin! は年 2 回発行ですが、今年 5 月は諸般の事情でお休みしました。